

Art Film Fes. Vol.24

セルゲイ・M・エイゼンシュテイン『メキシコ万歳』1979年、88分、35mm 監修：クリコリー・アレクサンドロフ 提供：ロシア映画社

上映スケジュール

☆：愛知県美術館蔵 ★：アートライブラリー蔵 ※：アートライブラリー蔵(大野一雄ビデオ・ライブラリー)
 「愛知芸術文化センター・オリジナル映像作品」は、文化情報センターによる実験的な映像作品の制作プログラムとして1992年の開館時にスタート。センター内の組織改編に伴い、2014年より、美術館が映像作品として収蔵するとともに、制作を継承しています。

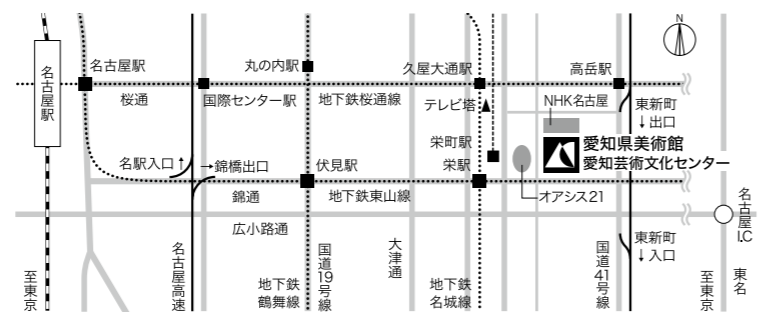
| | | | |
|---|-------|-------------------------------------|---|
| 11/29[金] | 18:00 | 映像人類学の源流を探る① | 吉田喜重 『夢のシネマ 東京の夢 明治の日本を映像に記録したエトランジェ ガブリエル・ヴェール』 1995年、55分、HD(DVD上映) 提供：吉田喜重 |
| | 19:00 | 映像人類学の源流を探る② | セルゲイ・M・エイゼンシュテイン 『メキシコ万歳』 1979年、88分、35mm、監修：グリゴリー・アレクサンドロフ 提供：ロシア映画社 |
| 「ムービング・イメージ・フェスティバル(MIF)2019」 ※上映作品等の詳細はウェブサイト(https://sites.google.com/view/movingimagefestival/)をご覧ください。 | | | |
| 11/30[土] | | インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル(ICAF)2019 | ほか |
| 12/1[日] | | インターリンク：学生映像作品展(ISMIE)2019 | ほか |
| 12/2[月] | | 休館 | |
| | 16:30 | オリジナル映像作品最新作 | 小田香 『セノーテ』 2019年、75分、デジタル |
| 12/3[火] | 18:00 | 牛山純一プロデュース作品集①「すばらしい世界旅行」 | 所蔵：川崎市市民ミュージアム 著作：日本映像記録センター(2本とも) |
| | | 河村治彦 『太陽と酒とロデオーメキシコ』 | 1973年、25分、DVD |
| | | 有働陽一 『悪魔に変身するメキシコ秘境のコーラ族』 | 1978年、25分、DVD |
| | 19:00 | 映像人類学の確立 | ジャン・ルーシュ ジャン・ルーシュ 『ある夏の記録』 1961年、90分、16mm(Blu-ray上映)、共同監督：エドガール・モラン 提供：アリアンス・フランセーズ愛知フランス協会、アンステイチュ・フランセ |
| | | ビデオ・アートの文化人類学 ナム・ジュン・バイク① | |
| | 16:45 | ナム・ジュン・バイク 『グローバル・グループ』 | 1973年、28分30秒、ビデオ、共作：ジョン・J・ゴットフリー ★ |
| | | 『ガダルカナル鎮魂歌』 | 1977-79年、28分33秒、ビデオ、共作：シャーロット・モーマン ★ |
| 12/4[水] | | ビデオ・アートの文化人類学 ナム・ジュン・バイク② | |
| | 18:00 | ナム・ジュン・バイク 『メディア・シャトル・モスクワ/ニューヨーク』 | 1978年、28分11秒、ビデオ、共作：ディミトリ・デヴィアトキン ★ |
| | | 『中国では切手は舐められない』 | 1978年、28分34秒、ビデオ、共作：グレゴリー・バトコック ★ |
| | 19:00 | ビデオ・アートの文化人類学 ビル・ヴィオラ① | ビル・ヴィオラ 『おのれとは如何なるものかを識らず』 1986年、89分、ビデオ ★ |
| 12/5[木] | 16:30 | ビデオ・アートの文化人類学 ビル・ヴィオラ② | ビル・ヴィオラ 『初夢』 1981年、56分、ビデオ ★ |
| | 17:30 | オリジナル映像作品最新作 ※再映 | 小田香 『セノーテ』 2019年、75分、デジタル |
| | 19:00 | 講演 | 港千尋 (写真家、評論家) |
| | 14:00 | 西欧からの視線 | エディン・ヴェレツ 『ダンス・オブ・ダークネス』 1989年、55分33秒、ビデオ ★ |
| | 15:10 | アジアからの返信 | キドラット・タヒミック 『悪夢の香り』 1977年、95分、16mm(DVD上映) ★ |
| 12/6[金] | 17:00 | 実験映画の文化人類学 | ジョナス・メカス 『時を数えて、砂漠に立つ』 1985年、150分、16mm 提供：メカス日本日記の会 |
| | 19:45 | 抽象映像への誘い | 石田尚志 『フーガの技法』 2001年、20分、16mm ☆ 牧野貴 『Generator』 2011年、20分、デジタル ☆ 小田香 『色彩論 序章』 2017年、6分、B&W、デジタル 提供：小田香 |
| | 13:30 | 概念としての旅① | 長野千秋 『O氏の死者の書』 1976年、88分、16mm(DVD上映) ※ |
| | 15:10 | 概念としての旅② | 山城知佳子 『創造の発端 -アブダクション/子供-』 2015年、18分、デジタル ☆ 田村友一郎 『アポロンの背中』 2016年、20分、デジタル ☆ |
| | 16:00 | 水の中の映像 | 田村友一郎 『アポロンの裏切り』 2016年、20分、デジタル ☆ ビル・ヴィオラ 『砂漠』 1991年、54分、ビデオ ★ |
| 12/7[土] | | 牛山純一プロデュース作品集②「知られざる世界」 | 所蔵：川崎市市民ミュージアム 著作：日本映像記録センター(2本とも) |
| | 17:30 | 大島渚 『生きている海の墓標-トランクの海底をゆく』 | 1976年、25分、DVD |
| | | 『生きている玉砕の島-サイパンの海底をゆく』 | 1976年、25分、DVD |
| | 18:30 | 観察者、あるいは機械の眼① | ビル・ヴィオラ 『空っぽの部屋を叩く理由』 1983年、19分11秒、B&W、ビデオ ★ |
| | 19:00 | 観察者、あるいは機械の眼② | 三宅唱 『THE COCKPIT』 2014年、64分、デジタル ☆ |
| | 11:00 | 概念としての旅③ | 大木裕之 『3+1』 1997年、82分、16mm ☆ |
| 12/8[日] | 13:30 | 特別プログラム「よみがえる山口勝弘」 | 山口勝弘 『メディア・サーカス』 1992年、7分、ビデオ IKIF 『ドキュメント/コラボアート「環」』 1998年、30分、ビデオ ★ 『ドキュメント/コラボアート「緑」』 1999年、10分、ビデオ ★ |
| | 14:30 | ディスカッション「映像、メディア系作品の収集と保存」 | パネラー：竹葉丈(名古屋美術館学芸員)、越後谷卓司(愛知県美術館主任学芸員) 対談：竹葉丈×越後谷卓司「山口勝弘と名古屋」 事例発表①：越後谷卓司「愛知芸術文化センターにおける映像作品の保存、修復」 事例発表②：竹葉丈「ナム・ジュン・バイクを地デジ化する」 |

◎やむを得ない事情によりプログラム、上映時間等を変更する場合があります。あらかじめご了承ください。

会場 愛知芸術文化センター 12階アトスペースA
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

主催 愛知県美術館
Tel.052-971-5511(代) Fax.052-971-5604
<https://www-art.aac.pref.aichi.jp>

アクセス 地下鉄東山線・名城線「栄」駅下車／名鉄瀬戸線「栄町」駅下車
オアシス21連絡通路利用徒歩3分



第24回 アートフィルム・フェスティバル

2019年11月29日(金) - 12月8日(日) *12月2日(月)休館

会場：愛知芸術文化センター 12階 アトスペースA

主催：愛知県美術館



入場無料



第24回 アートフィルム・フェスティバル
2019年11月29日(金) - 12月8日(日) ※12月2日(月)休館

特集

映像人類学をめぐる旅

「アートフィルム・フェスティバル」はドキュメンタリー、フィクション、実験映画、ビデオ・アートといった従来の映像のジャンル区分を超える、横断的な視点から作品を選定することで、映像メディアとは何か、その表現とは何かを探求する特集上映会です。

今回は今年6月に初公開した、愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品最新作・小田香『セノーテ』(2019年)を起点に、このユニークな作品が誕生する背景を映画史的に探求します。セノーテは、メキシコ・ユカタン半島北部に点在する洞窟内の泉で、かつてマヤ文明の時代に、雨乞いのため生け贄が捧げられていたとされる場所です。小田はその近辺に住むマヤにルーツを持つ人々にも取材し、現在はダイビング・スポットとしても知られるようになったセノーテの歴史や記憶の古層を掘り下げてゆきます。この作品はその成立過程で、映像人類学あるいは民族誌映画と呼ばれるジャンルに多くを負っています。その起点は、フランスのリュミエール兄弟が発明したシネマトグラフの時代、19世紀末までさかのぼります。リュミエール兄弟は、1895年のシネマトグラフ公開から程なくして、世界各地にカメラマンを派遣し、それぞれの土地で

風景や人々を記録しているのです。

西欧から非西欧地域へと向けられる眼差しには、多分に植民地主義的なバイアスがありました。映像においても西欧から来た撮影者が非西欧世界の被写体を一方的に撮影する暴力性の問題が内包されています。一方、民族誌映画は、撮影者と撮影される被写体が共に映画を作るといふ、〈共有〉の思想がその基調となります。その形成の過程を振り返ることは、近代以降、我々が抱えてきた支配や権力構造の問題を乗り越えるための示唆ともなるでしょう。

映像人類学的方法論は、ドキュメンタリーに留まらず、フィクション、実験映画、ビデオ・アートの領域にも波及しています。本特集では先行する作例を上映することで、その広範な波及力と、映像的イマジネーションが継承されてゆく様を見ることになるでしょう。

さらに「旅」や「水中撮影」「抽象映像」など、『セノーテ』にまつわるキーワードを抽出し、関連する作品も上映します。多彩な作品が織りなすプログラムをお楽しみください。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 2 | 3 | 5 |
| | | 4 | 6 |

- 1.小田香『セノーテ』2019年
- 2.セルゲイ・M・エイゼンシュテイン『メキシコ万歳』1979年
- 3.ビル・ヴィオラ『初夢』1981年
- 4.ビル・ヴィオラ『砂漠』1991年
- 5.ナム・ジュン・パイク『ガダルカナル鎮魂歌』1977-79年
- 6.大木裕之『3+1』1997年

映画の黎明から、映像人類学へ

吉田喜重が、映画生誕100年に当たる1995年に監督したドキュメンタリー『夢のシネマ 東京の夢 明治の日本を映像に記録したエトランジェガブリエル・ヴェール』は、映画がその出発点において、既に撮ることの暴力性を内包していたことを、当時の映像から読み解いてゆきます。ロシアのエイゼンシュテインが、生前には完成させることができなかった『メキシコ万歳』(1976年)等をへて、ヌーヴェル・ヴァーグの文脈からも注目されたジャン・ルーシュらにより、映像人類学は確立してゆきます。

テレビ・ドキュメンタリーのパイオニア、牛山純一

牛山純一は日本初の民間テレビ放送局・日本テレビの開局時に入社し、「ノンフィクション劇場」や「すばらしい世界旅行」などのドキュメンタリー番組をプロデュースした人物です。ドキュメンタリーという言葉は、今日、広く日常的に用いられていますが、牛山の活動なくしては、この状況は生み出されなかったかもしれません。今回、映像人類学に多大な貢献をした「すばらしい世界旅行」よりメキシコ・ロケ作品と、「知られざる世界」で映画監督の大島渚が水中撮影に挑んだ作品を、それぞれ2本紹介します。

実験映画、ビデオ・アートへの影響

故国リトアニアからアメリカへ、第二次世界大戦の難を逃れて移り住んだ詩人のジョナス・メカスは、新天地で実験映画のリーダー的存在として活躍します。メカスの作品は、映像による文化人類学と解釈されることもあります。それはメカスがコマ撮り等のテクニックを駆使しつつも、記録者としての自己に自覚的だったからかもしれません。ビデオ・アートでは、ナム・ジュン・パイクとビル・ヴィオラという対極的な作家が、共に文化人類学的文脈の作品を作っていた事実が興味深いでしょう。

講演 港千尋 (写真家、評論家)

12月5日(木) 19:00、小田香『セノーテ』上映に引き続き、写真家、評論家、多摩美術大学教授で、「あいちトリエンナーレ2016」芸術監督も務めた、港千尋氏による講演を行います。港氏は、1960年神奈川県生まれ。写真、現代アート、映像人類学にまたがる幅広い分野で制作、研究、発表と国際的な活動を続けています。著書に『映像論』(1998年)、『芸術回帰論』(2012年)、『インフラグラム』(2019年)など。東日本大震災後7年間にわたる撮影と考察をまとめた著書『風景論—変貌する地球と日本の記憶』で2019年度日本写真家協会賞を受賞。

特別プログラム 「よみがえる山口勝弘」

1950年代に、詩人の瀧口修造を命名者とする「実験工房」に参加した山口勝弘は、メディア・アートやビデオ・アート、環境芸術など、複数のジャンルを横断し、多様なメディアを取り入れながら、生涯、実験的な表現活動を継続したアーティストです。当館では開館した1992年に「テーマ展示」として《メディア・サーカス》を開催。今回、山口自身が手掛けた展示記録映像を上映。さらに当センターの吹き抜け「フォーラム」を舞台に1997〜98年に開催した『コラポアート』のドキュメントを上映し、当地における彼の活動を振り返ります。

ディスカッション 「映像、メディア系作品の収集と保存」

1980年代にナム・ジュン・パイクやビル・ヴィオラらの優れた作品が紹介されたことが刺激となり、日本ではビデオ・アートが社会的流行現象となりました。この頃、複数の美術館で映像作品を収集する動きも起こりますが、当時の標準的なビデオ・フォーマット「Uマチック」のデッキや、ビデオ彫刻、インスタレーション等で用いられたTVモニターも入手難な現実があります。今後、これらの作品をどのように保存し未来へと継承するのか、その現状と課題について考えます。パネラー：竹葉丈(名古屋美術館学芸員) 越後谷卓司(愛知県美術館主任学芸員)

関連展示 [入場無料]

小田香《メモリーズ・イン・セノーテ》

11月1日(金) - 12月15日(日)、10階愛知県美術館「プラスキューブ」にて、小田香による『セノーテ』関連展示《メモリーズ・イン・セノーテ》(2019年)を行います。開館時間：10:00 - 18:00 ※金曜日は20:00まで 休館日：毎週月曜日 ※ただし11月4日(月・祝)は開館、11月5日(火)は休館 アーティストによるギャラリートーク：11月24日(日) 15:00 - 15:30



同時開催 | ムービング・イメージ・フェスティバル(MIF)2019

上映作品等の詳細はウェブサイト(<https://sites.google.com/view/movingimagefestival/>)をご覧ください。

入場無料

全国の映像系教育機関より選出されたICAF(インターカレッジ・アニメーション・フェスティバル)やISMIE(インターリンク：学生映像作品展)などのプログラムを通じて、学生作品の「今」を紹介する映像祭です。また、近隣の芸術系大学や映像系専門学校より選出した特別上映プログラムのほか、参加校の教員や出品学生によるトークも予定しています。新しい才能との出会いの場へ、ぜひ足をお運びください。

インター・カレッジ・アニメーション・フェスティバル(ICAF)2019 ほか
2019年11月30日(土) / 会場: アートスペースA

インターリンク: 学生映像作品展 (ISMIE) 2019 ほか
2019年12月1日(日) / 会場: アートスペースA

主催: ムービング・イメージ・フェスティバル(MIF)2019実行委員会、愛知県美術館
共催: インターカレッジ・アニメーション・フェスティバル2019実行委員会、日本映像学会映像表現研究会
協力: 名古屋学芸大学 メディア造形学部 映像メディア学科